



医師として広島県を  
“えっと”楽しむマガジン



# #10

2018 Spring



医師として広島県を  
“えっと”楽しむマガジン

# ETTO

Feature | 特集

U・I ターン医師に密着  
経験を駆使して  
広島でできること



広島県地域医療支援センター（公益財団法人 広島県地域保健医療推進機構）が発行する、医学生・研修医・若手医師に広島県の医療をPRするための広報冊子です。今号は故郷である広島にUターンで戻ってきた医師、またIターンで広島へ来た医師に密着してそれぞれが目指す地域医療を特集します。



ETTO

【 えっと 】 2018 Spring

#010

広島県地域医療支援センター（公益財団法人 広島県地域保健医療推進機構）

## 高度医療から地域医療まで充実した 広島で臨床研修をしませんか



広島県には24の臨床研修病院があり、環境も病院規模も様々です。  
多彩な臨床研修病院が提供するプログラムは、  
必ずやあなたのニーズにマッチした研修を提供してくれることでしょう。

### 臨床研修病院合同説明会 (レジナビフェア) などへの出展



広島県では、できるだけ多くの研修医に県内で臨床研修をしていただきたいと願っています。  
県内の臨床研修病院が共同で、合同説明会「レジナビフェア」などに出席し、お揃いの真っ赤なベストで医学生の皆さんをお迎えしています。  
充実した臨床研修を受けられる広島にぜひお越しください。

### 若手・女性・ベテランの 活躍支援



県内で活躍する医師のために様々な支援を行っています。  
若手医師への医療機関横断的な研修支援、女性医師が働きやすい勤務環境整備・復職研修支援・子育て支援、定年勤務医等への求職支援など、やりがいをもって活躍できる環境づくりを進めています。

### 広島県での就業支援



広島県での就業をお考えの医師の方に、無料の職業紹介事業の許可を得て、U・I ターンの支援をしています。  
ウェブでの求人情報の提供のほか、個別のご相談にも対応しています。  
具体的な時期が決まっていなくても構いません。お気軽にご相談ください。

### 暮らしやすく楽しめる広島

広島県は、「日本の縮図」といわれているように、経済・社会・文化・商業・工業の様々な要素をもち、「都市」としての機能を有しながら、「自然（海・山）」も豊か。最近ではサイクリストの聖地として「しまなみ海道」に来られる方も増えています。さらに全国・県内移動のアクセスに優れているのも特徴。どんな人にも住みやすく、自分らしく自由に暮らすことができる、贅沢な地なのです。



### 地域医療への扉

## ふるさとドクターネット広島

広島県地域医療支援センター（公益財団法人 広島県地域保健医療推進機構）

<http://www.dn-hiroshima.jp>



広島県地域医療支援センターは、広島県・県内全市町・広島県医師会・広島大学が協働し、広島県の地域医療の確保等のため、平成23年7月に設置された公的団体です。

わたしたちは、広島県内の地域医療の確保に向けて、医師の地域偏在解消のための配置調整や医師確保、人材育成等に総合的に取り組んでいます。

医師の立場からの助言ができるよう、医監も在籍し、みなさまのご相談やご希望を伺っています。



【 お問い合わせ 】 広島県地域医療支援センター（公益財団法人 広島県地域保健医療推進機構）  
〒732-0057 広島市東区二葉の里三丁目2-3 広島県医師会館4階  
電話：082-569-6491 FAX：082-569-6492 E-Mail：iryou@hiroshima-hm.or.jp

出身地：奈良県  
出身大学：滋賀医科大学  
2002年：耳原総合病院、淀川キリスト教病院等で  
小児科を中心に研修  
2006年：奈義ファミリークリニック（岡山県）  
家庭医療後期研修  
2008年：奈義ファミリークリニック 副所長  
2009年：湯郷ファミリークリニック 所長  
2017年：5月より 三次市作木診療所 勤務

## 総合診療の経験が町のニーズにマッチ 待ちに待った常勤医師に喜びの声

三次市作木診療所

佐古篤謙先生

ATSUNORI SAKO

広島県と島根県の県境、豊かな自然に囲まれた山間の町・三次市作木町。  
人口1400人、高齢化が進むこの町に2年ぶりの常勤医がやってくる――  
待ちに待ったそのニュースに、町民たちは喜びの声を上げ、  
2017年春、温かな拍手とともに、作木診療所に佐古篤謙先生を迎えた。

編集制作 【民間医局】株式会社メディカル・プリンシプル社  
ArtDirector：勝又シゲカズ Writer：戸田千文 Photographer：小山英樹

「町民のみなさんが、とても歓迎してくれて。びっくりしましたが、身が引き締まる思いです」

作木診療所に赴任した初日について、穏やかな笑みを浮かべてそう話してくれたのは佐古篤謙先生。広島県と島根県の県境にある三次市作木町は、人口1400人弱の小さな町。作木診療所は、高齢化率およそ50%という町唯一の診療所だ。2年ぶりの常勤医師として、佐古先生がここに赴任したのは2017年5月のこと。待ちに待った常勤医師赴任のニュースに、町民たちの喜びは佐古先生の予想以上のもの。作木町を訪れた佐古先生を温かい拍手とともに、盛大に迎えた。

「もともと、私自身が田舎に住みたいという思いがありました。それに、田舎は医師が不足していますから。いろんな方々の様々な症状をみなければならぬ。総合診療に携わってきただけで、町のニーズがあっているんじゃないかなと思ったんです」



佐古先生の出身は奈良。滋賀医科大学を卒業し、大阪の総合病院で小児科を中心に学んだ。さらに岡山の県北にある診療所で家庭医療の後期研修後、同じ系列の診療所で長く地域医療に携わってきた。広島と特別縁があったわけではなかったが、転職を考えたときに岡山の近隣である広島も視野に。自身の希望とマッチした作木診療所への赴任を決めた。「はじめて作木町を訪れたときは、すごい田舎だなっていうのが正直な印象。コンビニもないし、信号は町に一つだけ。不便を感じることもありますが、みなさんがとても気にかけてくださいます。近所の方がほぼ毎日おかずを持って来てくれて（笑）ありがたいですよね」

今や佐古先生は、町のかかりつけ医。以前は40分以上も車を走らせて、三次市中心部の医療機関を受診するしかなかった住民たちも、今は作木診療所を利用する。佐古先生も地元の医師会や地域の介護福祉施設と積極

的にかかわり、三次市中心部の医療機関と連携を密に取りながら医療サービスの充実に献身している。一方で、専門医を求め三次市中心部の医療機関を受診する人もまだ多い。「集落の中である程度の方が解決できる。医療にせよなんにせよ、本来へき地、というのはそういう地域だったんだと思うんです。まずは身近な診療所で相談していただき、必要な病院を紹介する。専門医にかかる前に解決できる問題はたくさんあると思っています。片道40分かけていた時間をもっと他のことに使ってもらいたい。病気を抱けていても、それがその方の全てではなく生活の一部だと思えますので、生活されている地域である程度の方が解決できたほうが良い。もちろんそれには多職種での連携が必要であり、医師一人のことは限られていますが、ここはそれが伝えやすい地域じゃないかと思っています」

山に囲まれた小さな町で邁進する佐古先生。今後は、医師数人がチームを組んで地域医療に取り組む必要性を感じている。

「田舎は医師不足で、赴任しても孤独を感じる人が多いです。それが不安で一步を踏み出せない人も多し。数人いれば、悩みを相談し合うことができるし、在宅診療など地域でできる医療の幅が広がります。田舎でやってみようという人がいたら、ぜひ見学に来てください。伝えられることはたくさんあると思います」

### スタッフの声

佐古先生を迎える歓迎会では本当に多くの町内の方が集まり、先生もビックリされたと思います（笑）

先生は話をとても丁寧に聞いてくださるので、患者さんが身体のことだけでなく、何気ない日常のことまで楽

しそうにお話しする様子をよく目にします。小さな子どもから100歳をすぎた方まで、毎日多くの住民が先生を頼りに診療所に訪れています。



### 三次市作木診療所

〒728-0124  
広島県三次市作木町下作木1503  
TEL：0824-55-3651

[http://www.city.miyoshi.hiroshima.jp/hoken\\_m/kenko/sakugishinnryousho.html](http://www.city.miyoshi.hiroshima.jp/hoken_m/kenko/sakugishinnryousho.html)



「医師を目指す人は、救命を意識されている人が多いと思うんですけど、私の場合は人が亡くなる前のことが気になっていました」  
そう話すのは、広島パークヒル病院に勤務する花田喜美香先生。長く島根県浜田市の浜田医療センターに勤めていたが、息子さんの進学を機に、地元・広島に帰郷した。  
花田先生が医師を目指したきっかけは、1986年に公開された映画「人間の約束」。認知症をきっかけに、徐々に歯車が狂いだす家族の関係を描いた映画だ。

「その映画では、認知症がきっかけで家族の仲がぐちゃぐちゃになるんですが、でも、おばあさんだって子ども、孫と命を繋いで生きてきた。人は絶対に亡くなるのに、最期に悲しい思いをするなんて辛くなって」  
死を穏やかに迎えるようにするには、どうすればいいのだろう。花田先生は考えた結果、認知症にかかわる脳病態の研究ができる鳥取大学へ進学。放射線科に入学した。  
「私は研究より患者さんとコミュニケーションを取るのが好きなので」だから、放射線科で現場に出ることにした。

放射線科では、必然、がん患者さんと接する機会が増えていく。そんななか、気付いたことがあった。  
「がんも認知症と一緒に。入院が長くなると、家族の人が疲れて、お見舞いに来なくなって、関係がこじれてしまう。病気で辛い思いをしないように、家族との関係も良好であるようにするにはどうすればいいんだろうって。当時は、緩和」という言葉はまだ一般的ではなかったけれど、放射線科で働きながら、自分で調べて緩和ケアの道に進むことになったんです」

現在は緩和ケア部長として、患者さんはもちろん、その家族ともできるだけ顔を見ながらのコミュニケーションを心がける。

「医師だと話しにくいから、看護師に

必ず迎える最期を、少しでも穏やかに  
患者さんや家族に寄り添う緩和ケアの道へ

広島パークヒル病院

花田喜美香先生

KIMIKA HANADA

命を助けるために、医師を目指す人が多いなか、  
死に向き合い、穏やかな最期を助けるために医師を目指す人もいる。  
広島パークヒル病院で緩和ケア部長を務める花田喜美香先生が  
医師を目指したのは中学生のときに見た1本のある映画がきっかけだった。

出身地：広島県 尾道市  
出身大学：鳥取大学  
1999年：鳥取大学医学部附属病院 放射線科入局  
2002年：国立浜田病院 放射線科  
(現国立病院機構浜田医療センター)  
2007年：尾道市立市民病院 放射線科  
2008年：国立病院機構浜田医療センター  
放射線科  
2014年：県立広島病院 緩和ケア科  
2016年：4月より 広島パークヒル病院  
緩和ケア科

## 広島の魅力

親子そろって地元・サンフレッチェ広島の大ファンという花田先生。2017年シーズンはなんと全ホーム戦を観戦したとか。「患者さんも、私がファンって知っているから、勝つと『良かったね』って声を掛けてくれるんです」



医療法人和同会  
広島パークヒル病院

〒733-0851  
広島県広島市西区田方2丁目16-45  
TEL: 082-274-1600

<http://ph.wadoukai.jp>



「麻酔科医が来ることで、一番助かる病院がいいなと思っていました」  
愛知県から地元・広島県へのUターンを決めた福本正俊先生。新天地に、広島西医療センターを選んだ理由をそう話す。福本先生のUターンのきっかけは、家族の介護。病院からほど近い広島市佐伯区にある実家では、祖母と母が老老介護の状態になっている。そんな二人を少しでも支えられたらと、数年前に「ふるさとドクターネットワーク広島」に登録。娘たちの進学のタイミングを見て、2018年春から広島西医療センターでの勤務を決めた。

これまでは常勤の麻酔科医がおらず、外科医が麻酔を行うこともあったという広島西医療センターにとって、待ちに待った麻酔科医。福本先生は、同院で麻酔科の立ち上げを任される。麻酔科が目指すのは、手術件数を増やして、地域や病院に貢献すること。さらに福本先生には、一つ思いがある。

出身地：広島県 広島市  
出身大学：京都大学  
1997年：京都大学医学部附属病院 麻酔科入局  
2001年：名古屋市立大学病院 麻酔科  
2002年：岡崎市民病院 麻酔科  
2013年：愛知県がんセンター愛知病院 麻酔科  
2018年：4月より広島西医療センター麻酔科に勤務予定

「こちらの病院で育った研修医で、麻酔科医になった人がいると聞いています。一方で、麻酔科が選択肢になかったことで、その道を外れた人がいるかもしれない。麻酔科医を目指したい、そういうポテンシャルがある研修医の芽を育てていきたいですね」  
新たに研修医とも接する機会が与えられた福本先生が、研修医に伝えたいことは、自分が興味のある分野を進路に選ぶことだという。

「気に入った先生がいるからこの分野に、という人もいますが、それでは続きません。自分が一番興味がある分野に進んでほしいです。そのためには、あまねく、いろいろな科を体験してほしい。興味がないんじゃないかという科も、研修医時代に体験して、それで判断すればいいんじゃないかな」  
そんな福本先生が、医師の道を選んだのは高校生のころ。京都大学を卒業後、麻酔科に入局した。

「麻酔科を選んだのは、見学したときに一番楽しそうと感じたからです。学生時代に一緒に麻雀をして遊んでいた先輩が、一人で麻酔をやっている姿を見て、格好いいなと思って。将来の姿がイメージしやすかったのです。それに私は、内科や外科で主治医になっちゃうと患者さんが気になって家に帰れなくなってしまう。気が弱いんです(笑)」  
自ら、気が弱い、と語る福本先生。それは転職活動のエピソードにも垣間見えた。

## 周りのサポートで広島へUターン 麻酔科を立ち上げて地域医療に貢献

広島西医療センター

福本正俊 先生

MASATOSHI FUKUMOTO

愛知県から広島県へのUターンを決めた福本正俊先生。  
「麻酔科医が一番必要としてくれる病院に」との思いで選んだのは、広島県の南西部、大竹市で地域医療を支える広島西医療センターだ。  
今春から、同院で麻酔科の立ち上げに挑む福本先生に、その意気込みを聞いた。

「書類を見て、一番熱く麻酔科医を希望しているのが広島西医療センターだと感じました。だから面談をすることになったのですが、実は、見学に来る前からここに決めるつもりでした。私は一度会おうと断れないから(笑)。逆に、紹介してくれたみなさんが「すぐ決めないで」って。そう言ってもらえるのはありがたかったです」  
今回のUターン転職は、数年前から考えていたという福本先生だが、一歩を踏み出すまでは長かったそう。

「医局の垣根を超えての異動は、とてもエネルギーがいることです。だから異動をサポートしてくれる環境が整っている広島県は、とても恵まれていると感じました。『祖母が100歳を迎えるまでに帰ろう』とは決めていたけれど、私だけでは、それは守れなかったかもしれない」  
春から新たな職場でスタートを切る福本先生。待望の麻酔科医に院内も歓迎ムードであふれている。

## 院長からのメッセージ

奥谷卓也 病院長

当院は、地域医療の充実、政策医療の推進、医療人となる後輩育成などを目標とし、病院の機能・規模を拡大してきました。そんな当院にとって、麻酔科医の存在は最後のピースともいえるもの。技術はもちろん、組織横断的な仕事ができる素質のある福本先生は、待ちに待った人です。麻酔科の立ち上げは、地域医療のクオリティをさらに磨くことができると期待しています。



独立行政法人国立病院機構  
広島西医療センター

〒739-0696  
広島県大竹市玖波4-1-1  
TEL: 0827-57-7151

<http://www.hiro-nishi-nh.jp/>